

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大門 秀 司
2. 審査委員	主 査：(上越教育大学 教授) 宮 下 敏 恵 副主査：(上越教育大学 教授) 加 藤 哲 文 委 員：(上越教育大学 教授) 河 合 康 委 員：(上越教育大学 教授) 越 良 子 委 員：(鳴門教育大学 准教授) 小 倉 正 義
3. 論文題目	動的学校画の基礎的研究及び学校現場への臨床的応用の可能性
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 大門秀司 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月28日(木)13時35分～14時30分          場所：上越教育大学 事務局棟 中会議室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 本研究の背景</p> <p>学校現場において描画法を適用することの有効性について触れながら、唯一学校をテーマにした描画法である動的学校画について、これまでの先行研究を概観し、日本において動的学校画研究の蓄積が少ないことを指摘した。</p> <p>第2章 小学生が描く動的学校画の描画特徴の発達的变化に関する実証的研究</p> <p>研究1においては、小学生が描く動的学校画の描画特徴の発達的变化について、これまで十分に研究されてこなかった低学年の描画特徴もあわせて検討した。予備調査においては、低学年においても教示が伝わる工夫について検証し、動的学校画のチェックリストについても検討した。低学年においては、グラウンドなど校舎外で先生や友達と遊ぶ様子を多く描き、明るい印象の絵が多かった。中学年においては、学習場面が多く描かれ、描かれる友達の数が低・高学年に比べて多かった。高学年においては、校舎内で友達と話をするなど静的な活動の絵が多く、自己像と友達像の距離が近く描かれるという特徴がみられた。小学校低学年も含めた動的学校画の描画特徴が明らかにされた。</p> <p>第3章 小学生が描く動的学校画の描画特徴と学校適応との関連</p>

研究2においては、小学校3校の600名を対象として動的学校画、学級満足度尺度、児童用メンタルヘルスチェックリストのストレス症状尺度を実施し、低、中、高学年ごとに分析を行って小学生が描く動的学校画の描画特徴と学校適応の関連について検討した。適応群においては、全体的印象が明るいことや絵のその後の物語がポジティブな内容であること、表情が親しい・楽しいものが多いことなどが明らかになった。一方、不適応群においては、全体的印象が暗く、欠けることなく描かれた身体像が少ないなどの特徴が明らかにされた。

#### 第4章 教師と心理専門職の「動的学校画を見る視点」に関する研究

研究3においては、動的学校画を小学校教師20名、心理専門職25名に提示し、絵のどこに着目するのか、着目した理由は何か、どのような対応を考えるのかについて、その違いや共通点を適応群、課題群、不適応群の動的学校画ごとに分析を行った。心理専門職は不適応群の動的学校画を見た際に、教師に比べ「気になる」と答えた人が多いという結果であり、心理専門職の方がより不適応的な側面を見いだしやすいと考えられた。また、心理専門職は描画の全体的印象や人物像の係りに着目し、教師は人物像の表情など見て分かりやすい情報に目が行きやすいという結果であった。対応方法においては、教師は具体的ですぐに実践に活かせる方法を考えることに特徴がみられ、心理専門職は、教師と比較してより描画者の子供が訴えようとしているものに共感し、取り巻く環境や様々な事態を想定して対応するところに特徴がみられた。また教師、心理専門職に共通した対応方法としては、環境調整の方法が多くあげられるという結果がみられた。動的学校画をみる際の教師と心理専門職の視点の違いと共通点を明らかにし、学校現場において動的学校画を媒介として教師と心理専門職が連携する際の有効性と留意点を明らかにした。

#### 第5章 動的学校画を活用した教育相談

研究4においては、学級担任が動的学校画を教育相談に用いた際の有効性や課題について明らかにした。事例として小学校6年生2人を対象として、動的学校画を活用した教育相談を行い、その有効性と課題を明らかにした。有効な点として、1) 子供が学校生活の中から心に残ったことを選んで描くので、どのようなことを楽しんだり悩んだりしているのかが理解しやすい、2) 子供の人間関係を把握しやすく、絵に描かれた表情などから、友達への思いなどが読み取りやすいなど心理アセスメントとしての有効性が挙げられた。一方、課題として、1) 絵を描くことが苦手な子供にとっては表現が稚拙になり情報が得にくい、2) 他のアセスメント法と併用することでより有効に活用することができるなどが挙げられた。

#### 第6章 教育相談に動的学校画を用いた事例—学級担任から見た動的学校画の有用性—

研究5においては、小学校24学級の教師を対象に動的学校画を教育相談に用いることを試み、学級担任から見た動的学校画の有効性と課題、活用のアイデアについて明らかにした。9割の教師が、動的学校画を用いた教育相談は子供理解に役立ったと答えた。また、動的学校画を用いて良かった点として最も多かったのが「友達関係の把握」であり、次に「日常生活の把握」であった。一方、気になった点として最も多かったのは「絵を描けない子供への心理的負担」であり、次に「時間

への対応」であった。活用のアイデアとして、「定期的な実施」，「研修会での活用」などが挙げられた。学級担任から見た，動的学校画を教育相談で用いる有効性や課題が明らかとなった。

## 第 7 章 結語

本論文において得られた知見とその意義について述べ，最後に本論文における課題を述べた。

### 2. 審査経過

本論文では，いじめや不登校，自殺など多くの問題を抱える学校現場において，動的学校画を子供の心を理解するための方法や人間関係をアセスメントする方法として活用するために，小学生における動的学校画の発達的特徴を明らかにし，さらには動的学校画の描画特徴と学校適応との関連を明らかにしている。また学校現場において，教師と心理専門職が連携して子どもの支援を行うためにも，教師と心理専門職における描画を見る視点の違いを明らかにする研究も行っている。また実際に学校現場において，学級担任が教育相談において動的学校画をどのように用いるのかという臨床的研究も進めた。

このように動的学校画という手法を学校現場において用いることにより，子どもの心を多様な側面から理解できると考えられる。学校不適応を予防するための方法の一つとして，学級担任が教育相談などに用いる可能性についても検討を行っており，臨床的な応用が今後益々期待できる成果が得られている。

審査においては動的学校画を学校現場においてどのように用いるのか，対象者への教示の方法や教師が行う際の留意点などの具体的な点について質疑応答が行われた。さらには研究結果をどのように活かせるのか，教師と心理職の連携のありかたなどについても質疑応答が行われ，研究の成果と研究の限界についての的確に回答がなされた。

### 3. 審査結果

以上により，本審査委員会は 大門秀司 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。